

昭和拾遺

初晴や立枯松にあまねき日
新社員交へて今朝の昇降機
白帆消ゆ沖に五月の風余し
海へ虹一帆もなく立消えに
花桐に雲青年に志

竹林に発し螢と一川と

遅れゆく一羽必死よ秋の暮

かどはかされて熊手ゆくごと夕日の中

白を剗るうしろ檜山の垂り雪

お年玉大尽と街闊歩せり

階きざはしの幅員ひろし牡丹寺

もう一艘殖えて常節採る舟が

綱繕ふ手許けだるく海紅豆

鱸の花垂し弥次郎兵衛めく祭舟で

崎鼻に葛とおぼしき花吹かれ

佐久平に塩沢堰を引きし六川長三郎氏村人に水大将
と呼ばれ親しまれれば

日雷水大将の家震ひ

石炭紀の模型蜻蛉に秋が来て

曲ろくに鶏頭明り忌を修す

朝寒の神道かんのぼる下駄の音

戸隱の霧に娑婆氣抜かれけり
揃へ脱ぐ中に長靴糸瓜加持

大観

五柳先生色無き風に吹かるる圖
魂抜けし炭団法師と年越せり
本尊のうしろ辺りやしづり雪

大あくび春の海より貰ひけり

鹿尾菜干す手の影鹿尾菜よりも濃く

大茅の輪仕上り風が先づくぐる

誰もよく撮れてりんごの花の前

釣舟草霧に溺るる女坂

身じろげるとき邯鄲に鳴かれけり

裸木の蕊の白さをおもひけり
熱爛を一気に呷り口火切る